

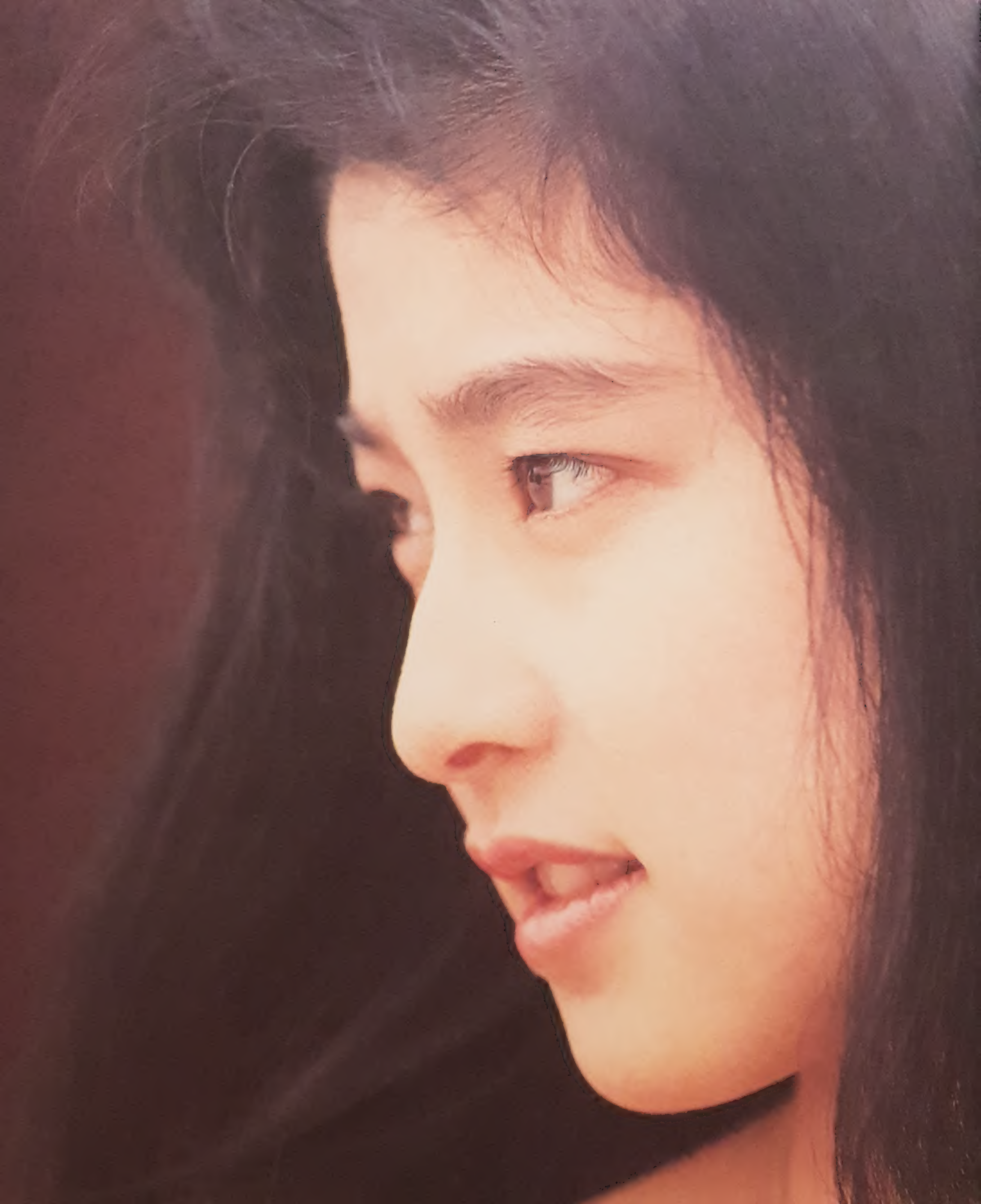
ORE・BOOKS

りくつじゃない。

CHISATOのホンネを聞いてくれ…

写真集
森高千里

撮影／木村　晴





CHISATO MORITAKA

●本名／同じ●出身地／熊本県●生年月日／昭和44年4月11日●身長／160cm、体重／44kg●デビュー／ポカリスエットのCMガールに選ばれてから映画『あいつに恋して』(東宝系）に主演。レコードデビューは、ワーナーパイオニアから「NEW SEASON」で。アルバム『ミーハー』で頭角をあらわす。●ラジオ日本『森高千里のミッドナイトクイーン』にレギュラー出演。●『ミーハー』『ザ・ストレス』など、作詞にも個性的な才能を発揮。

ORE·BOOKS

森高千里 写真集

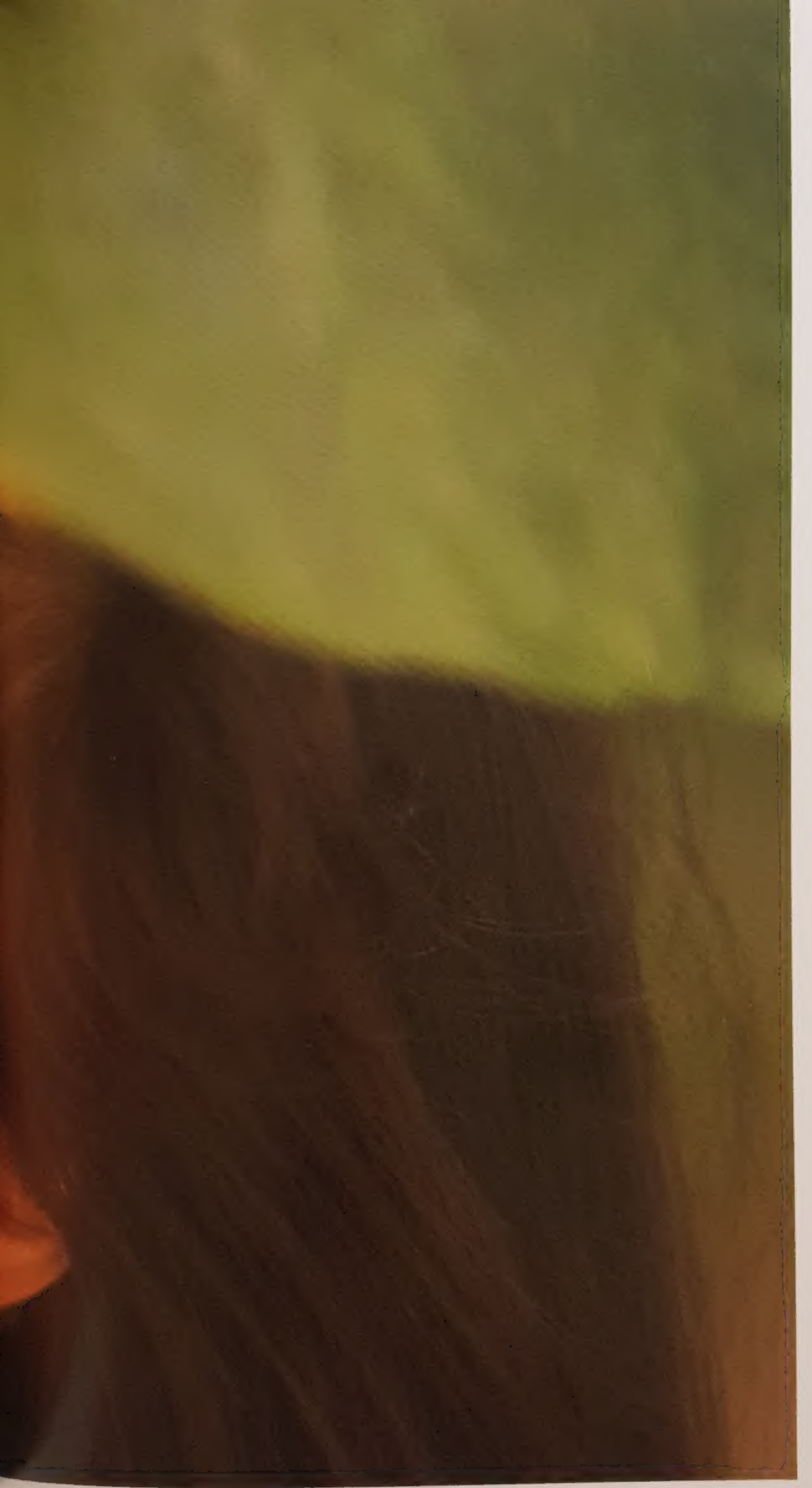
撮影／木村 晴



CHISATOのホンネを聞いてくれ…

りくつじゃない。

Chisato Moritaka



新しい季節







芸能界入りしたばっかりのころは、おっかなびっくりだった。でも、恥なんかかくだけかいてやれと開き直ったの。

東京暮らしも、もう3年目。すっかり慣れたっていいたいけど、まだ、多少の不安みたいなものはある。でも、東京暮らしをはじめた2年前に比べれば雲泥の差。なにしろ、上京したころは、毎日が未知との遭遇だった。しかも、入った世界は芸能界。周りの人は、みんな両親と同じくらいの年上だし、いつも忙しそうにしているし、挨拶一つするのもおっかなびっくりだった。熊本にいたときの私の周りといえば、ほとんどが同世代で、年上の人は、両親と兄と学校の先生くらいだったから、話すのも気楽だったし、なにより慣れた熊本の言葉でよかったわけだし。それがガラッと変わってしまったのだから、すっかり落ち込んで、自分のカラに閉じこもる毎日だった。だいたい、私は、人見知りするタイプじゃないのに、仕事なんかでも人の後ろに隠れるようにしたりしていた。

東京暮らしでいちばんの悩みは、地方出身者なら誰でも一度は経験する言葉の壁。特に、東京独特の「……なのね」「……じゃない」という女のコ語の語尾には困った。無理に「……ね」なんていうと取ってつけたような不自然さがあって、つい、単語、単語の羅列になってしまう。おそらく当時の私を知っている人は、なんてブッキラボウな女のコだと思ったんじゃない。でも、こんなことしてたら、仕事になんないや、恥なんかかくだけかいてやれとか開き直ったら、スラッと東京弁が出た。最初のレコードが出たときだったと思う。



私、お相撲さんが大好き。

特に、もう引退して親方になっちゃったけど、若嶋津サンが大好きだった。同じ九州人っていうこともあるけど、若嶋津サンって私の父とソックリさんだから。

私の父って、身長は170cmくらいで、普通の人だけど、ガッシリしていて、性格は、頑固で、意地っ張りで、それこそ〝男〟って感じがする。

でも、子どもとか母には優しい人で、叱ることはあっても、絶対手を上げたことがなかった。

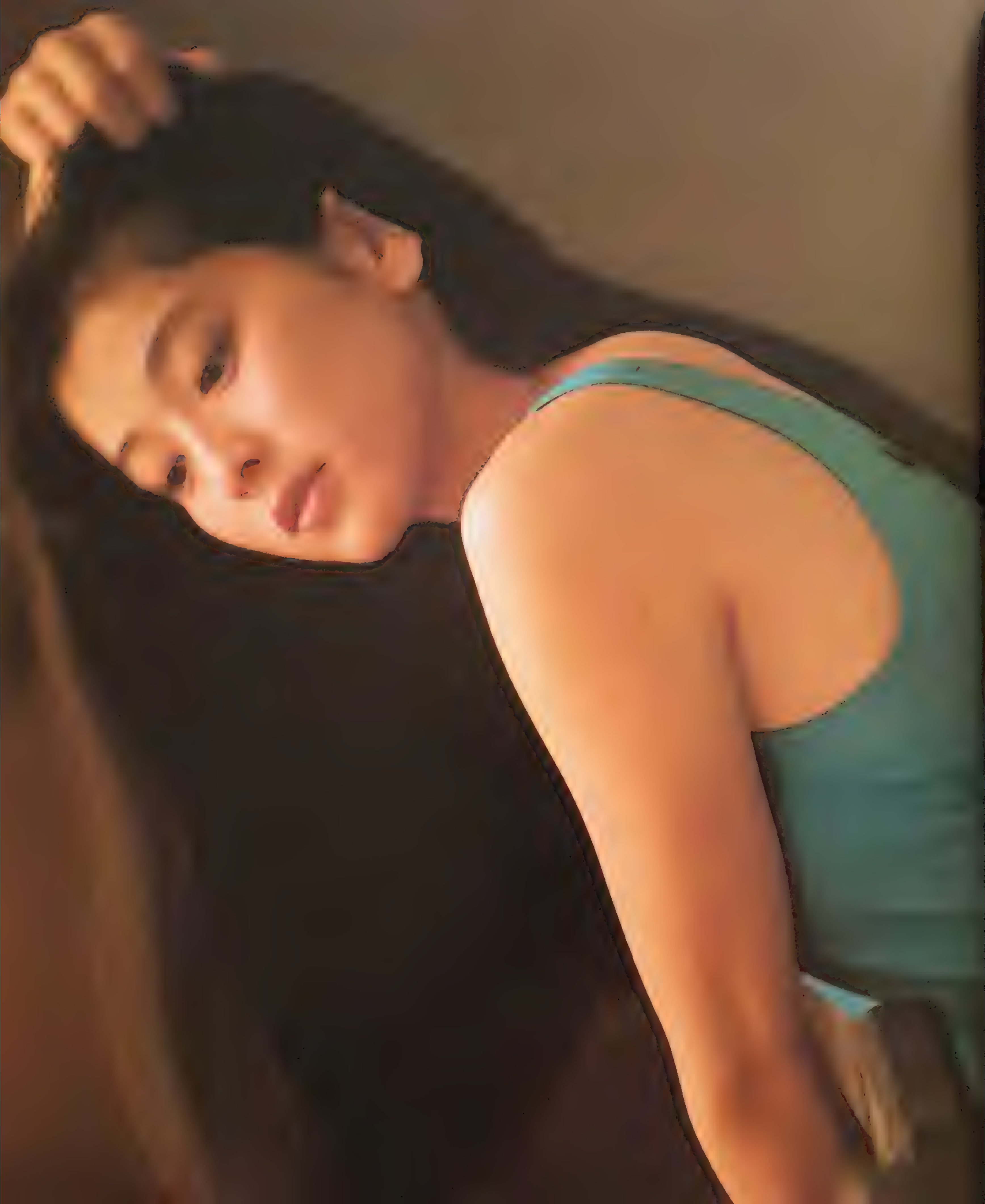
私は、そんな父が大好き。だから、男の人を見る目もやっぱり父を基準にして考える。

だから、ナヨナヨしていたり、DCブランドで飾り立ててフラフラ街を歩く男の人を見ると、見ている分にはカッコいいなとは思うけど、それ以上の感情は湧いてこないというか、男という感じがしない。

男は、やっぱりパワフルでなければ男じゃない、みたいなイメージがある。それが、一瞬の勝負に全身全霊を集中して戦うお相撲さんが好きな理由なんだと思う。

そして、男は、私の父のように、家族を大事にする人でなければならないと思っている。







このごろ、ようやくライブの楽しさがわかりかけてきた。

ライブのいちばんいいところは、なんといってもファンの人たちとじかに触れ合うことができるということだと思う。

実際、ライブとかイベントとかを重ねていくうちに、ステージと客席との間がグングン狭まっていくのを実感している。ただ、いま私がステージで演ったこと、歌ったことに対して、すぐその場でファンの人が反応してくれるから、非常に怖い面もあるけれど、一度ノッたら、やめられない、止まらないって部分もあって、そのスリルがまた楽しみでもあるわけ。でも、自分自身がステージを楽しめるようになった。また、ここをこう表現すれば、ファンの人たちが一緒に楽しんでくれる、というコツみたいなものがわかってきた。

歌の合間に、ステージから話しかけるんだけど、みんなにっていう感じじゃなくて、一人一人に自然に話しかけるって感じでしゃべると、ファンの人も素直に返してくれるということもわかってきた。

これは、当分、ライブがやみつきになりそう。







カップルが街を歩いているのを見ると「ああ、いいなあ、私も広い肩に頭を押しつけて……」なんて思ったりする。

私のいまの望みは、一生音楽とは暮らしたいということ、そして、もう一つは結婚ということ

とくに結婚は、絶対したい。音楽のほうはこれは仕事だし、いいかたは変だけど逃れられない宿命みたいなものだと思っている。だけど、結婚っていうのは、ひょっとして縁がなかったらできないかもしれないし。でも、それはいや。やっぱり、女のコだから、結婚を人生最大の目的にしたい。それに私は、子どもが大好きだから自分の子どもが絶対欲しい。

仕事の帰りとかで、カップルが肩を寄せ合いながら街を歩いている姿を見かけると、「ああ、いいなあ、私も広い肩に頭を押しつけて歩きたいな」とか思ったりしている。

ただ、いったん仕事に入ってしまうと、今度は音楽の魅力にとりつかれて、「これはこれで離れられないな」とか思っちゃう。そうすると、私に好きなヒトができたとしても、比重が音楽にかかっている状態では無理かなとか悩むの。私は、結婚と仕事が両立できるほど器用じゃないから、結婚はいまのところお預けかなとか、自分で自分に納得させている。

でも、絶対、結婚します。その時期は、予感としては自分の音楽がひとくぎりついたころになると思う。





男は無口がいいとかいうけど、私は、無口の人ってあまりノれない。やっぱり、男の人と一緒にいるときは、気分よくいたいっていうのがあるでしょ。私は、けっこう、おしゃべりなんだけど、相手が合わせてくれないと、ひとり語りみたいになっちゃうし、相手の雰囲気が暗いと、そっちに引き込まれて、お互いニラメッコみたいな感じになっちゃう。といって、会ってから別れるまで、ベラベラしゃべりっぱなしの人というのも困ります。やっぱり、2人で言葉のキャッチボールが楽しめるような人がいい。

そういう点では、ヒョウキンな人って好き。ヒョウキンな人っていうのは、だいたい、頭の回転が速いと思う。頭の回転が速いというのは、勉強ができるとかいうのではなくて、頭がイイからパッパッと臨機応変に言葉が操れるのだろうし、それに頭の回転の速い人って、人を退屈させないでしょう。ただ、わざとヒョウキンを装うのは、あまり好きじゃない。自然に、サラッと冗談が飛び出したり、その人といると楽しい気分になれる人が、私は好き。









Chisato. Moritaka



作った色が少ないから、グアムはすごく自然があるなって感じ。そのなかにいると、考え方まで変わっちゃうみたい。

グアムの人たちが、はじめて会った私たちにも、「コンニチハ」「バイバイ」とごく自然にいうのがいいな。





女のコにとって、デートは、自分を演出する絶好のチャンス。着るものにも、ものすごく神経使う。

女のコにとって、デートは自分を演出する絶好のチャンス。着るものにもすごく神経使う　それだけに、当日のお天気が気になるわけですよ。もっとも、デートする相手の人にもよりますけどね。たとえば、年上のヒトで、いつもビシッとしていて私がすごく好きなヒトだったら、もう、目いっぱいドレスアップしてしまうの。でも、いまのところはそんなヒトはいないから、一般的な、気軽でフランクなつきあいの男のコと女のコのデートの話をすると、まず女のコは、ふだん着ているものの中でいちばん好きな服とか着て行きますね。自分の好きな服を着ているときっていちばん自信が持てるから相手の人も、フォーマルな服じゃなくて、カジュアルっぽい感じのほうがリラックスして話がはずむと思う。デートは、なによりも雰囲気づくりが大切ですからね









私が男のコを異性としてはっきり意識したのは、高校に入ってからですね。もちろん、恋の対象としてというか、男のコを好き、嫌いのタイプにわけて考えるようになったという意味だけど。

男のコ、女のコということでの意識が芽生えたのは、中学に入って、初めての夏休みが終わった2学期。ほんの少し前の夏休みが終わるまでは男も女もなくて、一緒にワイワイ遊んでいたのに、学校へ行ってみたら、それはもう、見事なくらい男のコと女のコにわかれて、お互い口もきかなかったことを覚えてる。それは中学3年の春まで続いて、新学期がはじまったら、また、お互い話をはじめるようになった。でも、それは多分に好き、嫌いの感情が入り交じった会話で、子どものころのフランクさがなかった。









素敵だ・・・

お正月はやはり、家族そろってオトソと雑煮で新しい年を祝いたい。そして、みんなそろって初詣でっていう絵に描いたようなのがいいナ。

今年は、熊本の実家に帰って母の手料理に舌鼓を打ったけれど、忙しくてお正月に帰れず、ひとりぼっちの新年だったらと想像するとぞっとする。東京って、クリスマスはけっこう人出とかすごいけれど、お正月はまるで火が消えたみたいに静かだそうじゃない。

今年のお正月は、クリスマスのときのような大勢の中の孤独を味わわずにすんで、ほんとに感謝したけど、やっぱりお正月くらいは家族のぬくもりを感じながら、安心してゆっくりできて、のんびりゴロ寝しながらTVのオセチ番組を見たいもの。

同じオセチ番組でも、コンビニエンス・ストアのテイクアウトのお弁当を買って、1人きりで食べながら見るというのは、なんとも身の置きどころがないって感じて、すごくわびしいと思う。お正月だけは毎年、家族といっしょにいたいナ。







昔は居酒屋さんとか好きだったんですけど、最近はああいうワイワイしたところが好きじゃなくなった。

初めて雑誌に出たとき、今までは見てた側なのに立場が逆になって、自分が出ているってことが不思議だった。







お正月は、毎年、おじいちゃんの家に親戚の人たちが集まるんですが、そのときに貰うお年玉が私の楽しみだった。

高校時代、夏休みが近くなると、私を含めてクラスの女のコたちは急にソワソワして、夏休み前までには、絶対BFをつくるっていう目標を立てて、友達同士で競い合ったものでしたね。

女のコばっかりで海とか山へ行っても、盛り上がらないし、つまらない　やっぱり夏は、BFと思いっきり楽しみたいっていうわけ。なかには、この夏だけのBFでいいからとか、海に行くときだけでいいからとか、男のコに頼み込んだり、毎年大騒ぎでした。



Talk ESSAY

わたしの好きにさせて。。。



千里は一語一語しっかり考えながら話す。けっして思いつきや、その場の成り行きで、口を開かない。自分自身に思いを投げ返しながら、言葉を選ぶ。それがこのトークエッセイだ。

Chisato Moritaka



高校のころはディスコは厳禁で、もしわかったら停学だった。でも、ダメとかいわれると、よけいスリルがあって、それが快感だった。

Talk ESSAY

「私のことを大人扱いしてくれた母が、今でも好き」

たぶん、うちの親は私のことを信用してくれているんでしょうね。私がやりたいっていうことは、ダメだとかいわない

とくに母は、自分に責任が持てることだったら、やってもいいっていうか。別に叱られなかった。むしろ、若いうちになんでも経験しておいたほうがいいっていう考え方なんです

たとえば高校のころはディスコは厳禁で、もし、行っていることがわかったら、停学処分間違いなしだった。でも、ダメとかいわれると、よけいスリルがあってそのスリルを求めて行きたくなりますよね。でも、母は、ディスコならディスコに、何時に行って何時に帰るからと理由をいえば、親の立場として「どうぞどうぞ」とはさすがにいわなかったけど、学校に見つからないようにって感じで許してくれた。だから、バンドの打ち上げみたいな感じで、みんなと一緒に行ったりしたわね

バンドっていえば、高校生でバンドとかやるっていったら、たいていの親は反対しますよね。賛成する親って少ないと思うけど、母は、やっていいっていってくれましたね

芸能界に入るとき、父は私が東京に出てくるまでは、なんか暗い感じだったナ。というのは、私、はじめから芸能界に入るつもりがなくて、バンドとかは、音楽が好きだからやってたわけ　だから、父は意外だったんでしょうね　でも、母は芸能界入りについて、一切反対しなかった　もちろん、中途半端にするんだったら、最初からよしなさいよっていう感じ　それから、バンドとかをやっていたために勉強がおろそかになるんだったらよしなさいとはいったけど、なにがなんでも絶対反対という感じではなかった

もっとも、父も私の上京が決まると、すごく応援してくれました

だから、そういう点では、わりと自由な家風なんですね

そのかわり、嘘は絶対に許されなかった

実は、小さいときに一回、嘘をついたことがあったんです。そうしたら、母からものすごく叱られて、その後一週間というもの、まったく口をきいてくれなかった。

コタえました。なにしろ、母って子どもにとっては、食べることから、着ること、勉強にいたるまで頼らなければならない絶対の存在でしょ。その人が口もきいてくれないというのは、ショックだったし、すごくコタえてそれからは、嘘がつけなくなりましたね。

だいたい、母と私ってもう姉妹みたいなんです　もっとも、小学校から中学の半ばまでは、体格が違っていたし、母と子どもでしたけど、中学の後半からぐ～んと背が伸びて、母を追い越しちゃったのね

たぶん、高校生になってからかな、母が私をいちおう大人っていうか、一人前に扱ってくれるようになったのは。そのころから、ほんとに母とは何でも話せるようになった

たとえば、中学の後半から高校生になりたてっていう時期は、女のコってほとんどそうだと思うけど、お化粧とかにものすごく興味を持つんです。それで母の化粧品一式借りて、鏡に向かいました。母も快く貸してくれたしね。つまり、早い時期から大人扱いしてくれたことが、母親ではあるけれども、感覚は姉妹って感じだったんだと思う。

だから、母に隠しごとしたっていう記憶はないの。なんでも相談したし話しました。

「私、好きな男のコいる」とか、もう姉にいうみたいにね。母がまた結構ノリがよくて、「それから」とか「へえ、いいじゃない」とかいうからよけいぺらぺらしゃべっちゃう。

そのせいなのかな。私は、大人に憧れたり、背伸びして大人の真似をしたいって気はあまり起こらなかったですね。

たとえば、高校2年くらいになると、よく洋服とか、大人っぽいものを着たくて仕方がなくて、家の人に黙ってコッソリ買って、隠れて着るみたいなことするでしょ　私の友達とかにもそういうコが何人かいたけど、私はそんな気は起こらなかったわ。

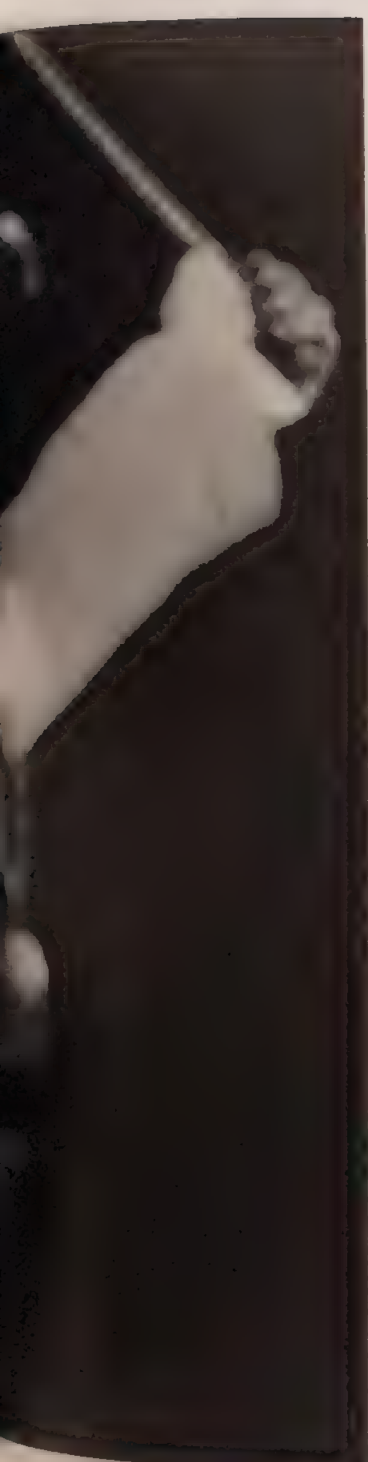
もちろん、私も女のコだから、ブティックとかのショーウインドーにすてきな洋服が飾ってあったら、「いいなあ」とは思いましたよ　でも、「自分があゝいう洋服が似合う年になったら着てみたいな」って感じで、欲しいなんて思わなかった。

子どもって、親に信用されると、逆にムチャクチャできないのね。

でも、そんな母が私は好きで、いまでも姉妹づきあいしてますよ。

「人前だと明るくしてるけど、ひとりになると思いきり泣く」

もう、ひとり暮らしにも慣れました
といいたいけど、家に帰り着くと、見ても見なくても、必ずテレビをつけてる　そうすると何か安心する　お風呂に入っているときとかも絶対消さない　とくに仕事先でなにかあったり、悩みごとがあったりしたときとかは、考えなくてもいいことを考えこんじゃってクラ～くなっちゃうからダメですね。
それは、やっぱり人恋しいから
たって、熊本の家にいたときは、「ただいま」っていったら、「お帰りなさい」っていってくれる母や家族がいたけど、東京に出てきてからは、これが逆でしょ　仕事のときはみんなとワイワイやってるけど、家に帰るとひとりっきりって感じだからね。
私って、ヒトからみると一見、気が強くて、カンコで、絶対涙なんか見せないみたいなイメージがあるかもしれないけど、本当は泣き虫なのかもしれませんね。
喜怒哀楽なんかも激しくて、テレビ見てても、映画を見ても、笑ったり怒ったり、そうかと思うとボロボロ涙を流す　驚き方もオーバーすぎるくらいで、ホラー映画なんか見に行っても、もうぜんぜん怖くないシーンなのに、「キャーッ！」とか声を出して驚く　友達なんか、私の驚き方に驚いて、「千里は、ヒトの10倍驚くから、もう一緒にホラー映画見に行かないからね」とかいわれてる
でも、人前で涙を見せるっていうのだけはしませんね。
結局、気性が激しいからで、「人前で泣くなんて女のコらしくない」とか、頑張っちゃうんです。
女のコが泣き虫っていうのは、けっこう伝説の部分があって、本当はみんな負けず嫌いで、いくら悲しくても、淋しくても、人前では明るく振舞う女のコが、今はけっこう多いんじゃないですか。
私なんか、その代表選手かもしれませんね
たとえば、なにか困ったことや悩みごとなんかあっても、他人に打ち明けてスッキリしちゃうみたいなことができない。自分のことなんだから、自分で考えなさい。考えて切り抜けなさい。なんて、自分の中のもうひとりの自分が励ますわけ。そうすると、わかったわよ　とか、辛いけど自分で処理してしまう
それと、世話好きっていうか、親友とかに相談するつもりで電話かけるでしょ　そのときに、私より先に親友から、「ねえ聞いて……」とかいわれちゃうと、もう自分のことはそっちのけにして相談にのっちゃう
それで、「じゃあねえ」とか電話切ってから、自分の悩みを話してないことに気がつくんですよね
ただ、私の悩みとかは仕事がらみが多いから、親友に話しても内容が通じないっていうか、わからないし、かえって迷惑かな、とか思うから、切り出しにくいっていうこともありますね　それは、親に話しても同じことだしね
だから、結局自分で考えるしかない。その考えるときは、ひとりきりのときっていうことで、ドーンと落ち込んだりしてるわけ
そんなときは、ジョディ・ワトリーとか、どっちかといえば、ハードなブラックっぽい音楽を聴いて、「頑張って明るく生きよう」っていう女のコの代表って感じでいくゾ、とか、自分を励ましているのね。
ときには、こんなときに頼れるヒトがいたらな、とか思うけど、いまのところは仕事のほうに比重をかけているから、当分家のテレビとCDはつけっぱなしになるでしょう。



Talk ESSAY

「本当は、泣き虫だけど、頑張って明るく生きよう」っていう女のコの代表って感じでいくゾ、とか自分を励ましているの



「離れてみて、ふと淋しさを感じたら恋の始まりが……」

私、自分は、これには絶対自信がある、これなら自分自身をぶつけることができるんだっていうものを持っている男のヒトって、すてきだなと思う。たとえ、それが上手でなかったとしても、一生懸命やっているヒトって魅力的ですね

頭がイイに越したことはないけど、自慢たらたらとか、知識をひけらかすっていうタイプは、あまり好きじゃない。たとえば、ヒトになにかを教えるのでも、「こんなことも知らないのか」みたいな態度で接するヒトはイヤ。そうじゃなくて、「あ、それはこうこうするといいね」って、サラっとした態度で、的確なアドバイスをしてくれるヒトは、「ああ、このヒト、できる」とか尊敬しますね。

顔、形にはこだわりません。

よく、どうせデートするなら、見かけがイイほうがいいなんていう女のコがいるけど、ヒトを好きになるっていうのは、見かけじゃないと思うし、いくら顔や形がよくても、イジワルだったり、鼻持ちならない性格をしていたら、そんなヒトを好きになった自分がミジメでしょう。それに、男のヒトって中身が充実していれば、姿形もスキッと見えてくるんじゃないかと思う。

だから、姿形よりも、そのヒトと話してみて、気が合うとか、趣味の傾向が同じであるとか、考え方が同じであるとか、共通点があったほうが、話がハズむし、魅力的に思えるものだと思う。少なくとも、「このヒトと会うと肩凝りがして……」というよりも、ノリが違ってくると思う。

だいたい私は一目惚れしないタイプですね。

それは、カッコいいヒトと会ったら、イイなあとは思うけど、それとそのヒトを好きになることとは、次元が違うの。ただ、いくら人間性に優れていても、着ているものとかがフケツじゃ困るけど、流行ばかりに気を取られている男っていうのはフケツ以上に嫌い。

だって、ブランドに支配されているなんて、自分は一体どこにあるのって感じでしょう。それよりも、自分に似合うカッコウをしているヒトのほうに魅力を感じる。つまり、自分を知っているヒトですね

よく、ワルに魅力を感じるかってきかれるけど、ワルだってシンが通っているならいいですよ。ただ、パッパラパー丸出しとか、ワルを売り物にしているようなヒトは、流行を追っているヒトと同じで好感は持てないな。

面白いヒトは好きだけど、ところかまわずっていうか、人と会えばダジャレを飛ばし、こっちのいうことには耳を貸さないっていうヒトは、ダメね。あと、妙にヘラヘラしているヒトも好きになれない

だいたい八方美人は男には似合いません。

では、どんな感じで知り合うのがいいかっていうと、私は、学校とか、勤め先の会社でもいいんだけど、はじめは、顔なじみとか友達みたいな関係で、ふとしたときに、「あ、あのヒト、今日はいないけど、どうしたのかな……」とか、気になる存在になって、それが、一度や二度ではなくなったときに、「もしかしたら、あのヒトが好きなのかな」っていう予感がある。でも、そのころは、まだ会って話しても、気が合う、気になる存在というだけで、好き という確信は生まれてこないと思う。

それが、今日、そのヒトに会えると思っていたのに会えなかったとか、そのヒトが私の目の前からいなくなったときに、「さみしいな」「カレがいないとおもしろくない」とかを感じはじめたら、「好き」という予感が実感に変わったときだと思う。

そのときは、そのヒトのことが、私の心の中でかなりの部分占めているのだと思う。やっぱり気になる存在というか、そのヒトがいないと、落ち着かなくなるっていうか、変な感じがするんじゃないかしら。

だって、それまで、学校が嫌いで仕方なかったのが、カレに会えるから、みたいなことでサッサと登校したり、逆に学校は、パラダイスみたいになっちゃいますからね。

それに、目が違ってくるの。自分では意識してないんだけど、ふっと気が付くと、目の前にカレがいる。それは、カレがいるんじゃなくて、私の目がカレを追っているわけね。

でも、カレを追いかけたりはしない。もし、今日会えなかったら、「明日は会えるかな。会えたらいいなあ」みたいな、そういう感じのほうが私は好き。期待感に震えるみたいな興奮がたまらないの。

そして、恋におちるというのが理想ですね。

よく、私の好きなタイプのヒトじゃなきゃ

Talk ESSAY



イヤで、はっきりいう女のコがいるけど、私は、それは現実的じゃないと思う　それは理想であって、その理想に近いヒトであればいい、というのが大事ですよね　でも、私は、目の前に現れたヒトが好きになった　そのヒトが、好きなタイプだっていうことのほうが正解だと思う

ただ、理想のタイプはっていうのであれば、私が人の先頭に立って引っ張るタイプなので、その私をより引っ張ってくれる男性が好き、そして光っていて頼れる感じのヒト　精神的にも肉体的にも逞しいヒト

そして、もう一ついうなら、私の父って大柄でものにこだわらず、すごく逞しいヒトなの　その父を超えるようなヒトですね



私ってわがままもいいところ
そして矛盾だらけ
でも、私を許してくれる
ヒトがいたら、
私、絶対そのヒトに
恋しちゃう

Talk ESSAY

「恋をしても大丈夫っていう時期がくるまで恋はお預け」

私、いい恋をしたいナ

そのヒトは、ほかになにもいらないから、会っているとき安心できるっていうか、ホッとするヒトがみつかればって思っている。

恋っていうのは、男と女の緊張感をいかに素晴らしく持続するかだっていわれているけど、緊張感って、そうそういつまでも持続できないと思うし、そんな思いをいつまでも引きずっていたら、くたびれ果ててしまう。

それは、最初は、すごく緊張すると思うけど、やっぱり、いつもいつも会うたびに、「ああ、会えてよかった」って、ホッとするようなそういうヒトとめぐりあいたい。

私は、嘘が絶対嫌いだし、なんでもはっきりしないと気がすまない性分で、好きなものは好きというし、嫌いなものは嫌いって、はっきりいうほうだから、なんでもいえるヒトがいい。

たとえば、相手の人にとっても、私にとっても耳が痛いことをいい合えるとか、なにごとも隠しごとをしないで相談できるヒトがいい。こんなことをいうと嫌われるかな、とか相手の心を推し量りながらつきあうっていうのは、私の性分に合わない。嫌われるかもしれないけど、腹にしまっておくより話してしまう。また、話しやすい雰囲気にしてくれる懐の広いヒトがいい。

私、よく友達とかから相談を受けて、自分のことをそっちのけで、あれこれアドバイスしたりしている手前、こんなことというと、友達に叱られそうだけど、本当の悩みを打ち明けられるのは、同性よりも異性のほうがいいやすいんじゃないかしら。同性だと分かり合ってしまう部分が多いから、かえって本当の解決策は生まれないと思うの。

それは、相手にしてみれば、デートのたびに、女のコの悩みを打ち明けられたんじゃたまったもんじゃないでしょうけど、そこをシッカと受け止めてくれる男性がいたら、私、その人に絶対憧れちゃう。

それもだけど、いったん恋に落ちたら、私ってものすごいやきもち焼きになる。もし、相手のヒトが、ほかの女のコと楽しそうに話でもしようものなら絶対角を出しちゃう。それよりも、好きになりたてからもう、大変でしょうね。私を見つめたら、ほかの女のコには脇目もふっちゃ嫌だとか、なんでこっちを見てくれないのとか、もう独占欲丸出しで迫っちゃう。そのくせ、いざ、相手が私に夢中になったと知るとプイとか横を向いて、お熱はもう冷めましたみたいな態度を取るでしょうね。私ってわがままもいいところ。だいたい女のコってわがままなものなんですよ。そして矛盾だらけ。でも、私を許してくれるヒトがいたら、私、絶対そのヒトに恋しちゃう

そうはいっても、じゃ、実際にそういう相手がいるのかというと、わがままいえるお年ごろの男性にめぐりあうチャンスはないの。

ほとんど毎日顔を合わせている人って、恋の予感のまえに慣れちゃって、いまさらって感じだし、同じ年のヒトより、父親の年に近いヒトたちばかりなので、恋の気分にはちょっと遠いかなっていう雰囲気なの。

だから、たまに学生の友達とかに会って、合コンしたとか、コンパですごく盛り上がったなんて話聞くと、「ああ、イイなあ、楽しいだろうなあ」とか思っちゃってます。

もし、仕事が楽しくなかったら、私、恋の気分に誘われて、仕事を放り出してしまうでしょうネ。

幸か不幸か、いま、私は、仕事が楽しいから幸福の青い鳥を夢見ているヒマがないの。

もし、カレができても、仕事に時間を取られて、私はもちろんお相手できないし、相手も近寄りがたいとか思って、いつしか離れていってしまうと思う。やっぱり、つきあうからには、できるだけ長く恋をしたい　なかにはそのときが楽しければいいじゃないとかいって、1週間とか1か月、恋の炎に身を焦がすことに憧れる女のコがいるけど、それは、私の趣味じゃない　だから、恋をしても大丈夫っていう時期がくるまで私の恋はお預け

でも、恋には憧れます

きっと、会った瞬間に、このヒトだっていうヒラメキがあると思うの　そして、話をしているうちに、胸がキュ〜ンと締めつけられるような感じになって、その人の顔とか声とかが私の中にはっきりと印象づけられる。そのときが私の恋の助走。それから、グングンそのヒトへの思いがつのってふくらんで恋に落ちる。そう思うだけで胸がワクワクする。

だって、女のコにとって恋は、人生最大のイベントなんですもン。

楽屋を出てステージに行くまでの
自分と
ステージに立ったときの自分が
まるでちがう人間じゃないか
という気さえする



Talk ESSAY

ステージに立てば、なんでもやれる、やんなきゃいけない

歌手活動のなかでいちばん重点をおいているのは、ライブ。なんといっても、ライブがいちばん楽しいんです

最初はもう、何がなんだかわかんないうちに、自分が楽しんでやってたんですけど、最近は、だんだんファンの人たちが盛り上がって、自分自身も盛り上がっていくのがわかるようになった。それに、ファンの方がいて、そのステージに立ったときじゃないとできないことがあるんです

私のライブを見た人は、そんなバカなって思うかもしれませんが、本番が始まる前の私は、ステージのソデで出を待っているときなんか、もうダメとかよくいっている。それがね、ステージに足を踏み入れると、もう平気になってしまう。それこそ、ステージに立てばなんでもやれるような気がする、っていうか、やんなきゃあいけないんだっていう気になるんですね

私を見にきてくれて、一緒に歌って楽しんでくれているんだって思えば、自然とそういうふうになります。だけど、ステージでやったことをステージから降りてから、やれといわれてもできないし、何をやったか忘れていることもある。ステージでひらめいて、その瞬間の動きもありますから

それこそ、楽屋を出てステージに行くまでの自分と、ステージに立ったときの自分が、ちがう人間じゃないかという気さえする。あとからビデオなんかで、自分のステージを見ていると、自分がやったことなのに、何であんなことができたのだろうと、自分自身でさえ驚いている

最近になって、どうやらそういう自分自身を見つめられるようになって、わかったことがあります。ステージで私が緊張していたら、ファンの人もすごく緊張するし、私が楽しくやっているときは、ファンの人も楽しんでくれているということ。だから、まず、私がステージで楽しくやらないとダメだと思った。

今回の「見て」のツアーは、今までのコンサートがどっちかといえば、ライブハウスのノリで最初から最後まで、飛ばしていくみたいな感じだったけれど、そういうノリを変えてみたんです。私自身がそういうノリに飽きてきていたから、たぶん、ファンの人も飽きているんじゃないかと思って。

具体的にどういうステージにするかというのは難しかった。一時は、パニック状態まで行ったんです。もちろん、歌や踊りや舞台を変えていくわけですけれども、今までの私が変わるかしら、っていうことですごく悩んでしまった。いろんなことがあったけれど、変わんなきゃあいけないんだと思うようになってから、楽になったというか、やりがいをすごく感じるようになりました

変えたことの一つは、オープニングを変えたこと。どのライブへ行っても、まずバンドが入って、次に歌手が入ってくる。そして、後半に盛り上がって、アンコールで終わる

こういう構成だけにはしたくなかったし、しちゃあいけないと思った。ファンの人には、この構成が見えてるんですよ。それで、今回、初めの3曲は、私はバンドでなく、テープで歌う演出を取り入れてみた　あっちこっちに目が行くよりも、自分を見せるというか、ファンの人の目を私に引きつけることが、すごく大切だと思ったんです。

それと、最初のころのライブでは、ファンの人がノッてないと、あっ、ノッてないんだなって、すごく悩み、ノせなきゃあいけない、ノせなきゃあいけないって、焦ったけれど、今回は、そんなにノせなきゃあいけないとは思わなかった

新しいことを試みると、みんな戸惑いってありますよね。その反応を見てますし、反省はいっぱいありますけれど、ファンの人の手応えが私にはあったように思えるんです。3枚目のアルバム「見て」がきっかけになっていますが、自分自身も、このツアーで変わっていけるというのがわかったから。すごく変えてよかったな、と思う。

こんなことがあるから、ライブはやってて楽しめるんでしょうね。自分が好きなことができるって、いちばんいいなって気がする。それにライブをやっていると、ファンの人の反応がすぐ返ってくる。そういう部分では、すごくシビアーなんですけど、その反応を見て、この次はこうやろうとか、あれをやろうとかいろいろと思いつく。それで、私自身が奮い立つから。今では私の心の支えみたいになっている。次のツアーも、今回のことをしっかり受けとめて、準備を始めているんです。

「クリスマスだけは、一緒にいてくれるカレが欲しいな」

東京に出てきてから、まだクリスマスのパーティーをやったことがない。

熊本にいたころは、けっこうクリスマス・パーティーが冬休みのメインイベントって感じだったから、ちょっと淋しい気がする。

私が、はじめてクリスマス・パーティーをやったのは、中学3年生のときだった。友達の家に、男のコ抜きで女のコだけ5～6人集まって、ケーキをまず頼んでおいて、料理を作れるコは作って、あとはそのお友達の家のお母さんが作ってくれた料理を食べながらお喋り。そのあと、ボーリングへ。

こんな感じのパーティーだった。いま考えると、可愛いなって感じのクリスマス・パーティーだったけど、それはそれで楽しかった。

高校に入った年も、また女のコだけでやったけど、男のコ抜きのパーティーは、そのころになると、ちょっと刺激がなかったことはたしかですね。

でも、とにかくみんなでワイワイやるのが大好きな私は、クリスマスが待ち遠しくて仕方がなかった。そのときほど、楽しい時間は早く過ぎていくものだと感じたことはない。

私の場合、けっこう楽しいクリスマスだったけど、クラスの友達のなかには、10月の衣替えで制服が冬服に替わったとたん、「クリスマスに彼がいないなんて考えられない」とかいって、「彼が欲しい、誰かいいコ知らない」って聞いてたコもいましたけどね。

もっとも、その時期は、それほど切実ではなくて、まだ比較的のんびりムードでした。

でも、やがて木枯らしが吹く11月に入っても彼がいないコは、「ねえ、クリスマス一緒にしない」って、男のコに声をかけたり、かなり焦ってましたね。

ふだんはそれほどでもないんですけど、クリスマスの晩だけは、ちゃんとそばに男のコがいてほしかったんです。その月だけは、いないとすごく寂しさが身にしみる。そういうときは外に出たくないですね。

たとえひとりじゃなくても、女のコ同士で行くのも、精神的に何かイヤな感じ。街に出ると、あっちにもこっちにも楽しそうなカップルがいるわけ。そんなとき、友達と「コンニャロー」っていってたもの……。

今は、クリスマスだけの彼なんて、いくら寂しくても考えないけど、父や母から離れてひとりで暮らしていると、ほんとの恋人が欲しい。その人は、一緒にいて安心できる人っていうか、ホッとするような人だったらいいですね

といっても、最初は好きになるかもしれないって期待しているから、すごく緊張すると思う でも、いつもいつも会うたびに緊張していたら、続かないんじゃないかしら やっぱり「あー、会えてよかったな」というような人でないと

私は、嘘いうのが嫌いだし、なんでもはっきりしないと気がすまない性分で、好きなものは好きというし、嫌いなものは嫌いってはっきりいうほうだから、なんでもいえる人がいい。

たとえば、相手の人にとっても、私にとっても耳が痛いことをいいあえて、なにごとも隠しごとをしないで相談できる人がいい。こんなことをいったら嫌われるかなとか、相手の心を推し量りながらつきあうっていうのは、私の性分に合わない。嫌われるかもしれないけど、いったら安心した、というような気持ちの大きい人がいいですね。

そういう人は、何か、あっこの人だな！ っていうのを感じる。顔とかじゃなくて、理想っていうと大げさだけど、会って喋ってみて、あっ、この人っていうのが、たとえそのときわかんなくても、何日かたってわかるときもある。そういう人とは、一緒にいたいなあ、とか、一緒にどこかへ行きたいなって思うはず。家に帰ってゆっくりしているとき、テレビにディズニーランドのCMが出たら、あー、あの人と行きたいなって思う人なんじゃないかな。

仕事が楽しくなければ、そういうことばかり夢想しているでしょうけど、今は、仕事がいちばん楽しいから、そのことに時間を費やしたりしなくてもいい。

だって、今の状態だったら、どちらかがあやふやになってしまいそうだから、仕事のほうがこれで大丈夫だっていうぐらいに、落ち着いてから付き合いたいですね もし、そうなったら、少し時間も心の余裕もできるだろうから、そのときでいい でも、クリスマスが近づいてくると、同じように、一緒にいてくれる人に想いをめぐらすかもしれない

Talk ESSAY



あっ、この人っていうのが
たとえそのときわかんなくても
何日かたってわかるときもある
そういう人とは、一緒にいたい
一緒にどこかへ行きたい

失恋の歌だからといって、苦しいとか悲しいとかを歌うことはないでしょ。そんな歌ばっかりステージに乗せたら、落ちこんじゃう。



Talk ESSAY

「"失恋したからって落ちこむのよそう"っていう応援歌なの」

詞を書こうと思ったのは、最初のレコードを作る時点で、自分のレコードなんだから、自分もレコード作りに参加したいっていうのがキッカケだった

じゃ、私にできることはなんだろう。作曲をやりたいけど、まだまだそういう力はないし。だけど、詞なら自分の言葉で書けるんじゃないかな。もし、書いてみてダメだったら仕方がないってアキラめるけど、なにかにチャレンジしてみてもいいのではないかなということで書きはじめた。

でも、スタッフの人のところに持ち込んでみると、あそこが悪い、ここがちょっと変だとか、なかなかOKにならない。何度も何度も書き直したりして、どうにかモノになるようになったの。

私の歌は、ほとんどが失恋の歌なのね。でも、暗い感じはないでしょ。

だって、失恋したからってメソメソすることはないじゃない。フラれても、いつまでも泣いたり、クジけたりしないで、前を見て歩こう、明るく行こうみたいな歌がけっこう多いんです。

たとえば、「ゲット・スマイル」なんか、気の強い女のコが主人公になっていて、フラれて悲しいことは悲しいけど、持ち前の強気で、自分に気合いを入れながら生きる、みたいな歌だしね。

これは、私も含めていえることだけど、女のコって、芯には強いものを持っていて、一度や二度の失恋がなんだ、このヒトとの恋は実らなかったけど、それは、このヒトが自分に合わなかったんだ、とか、自分に都合のいい理屈をつける、そして、いずれまた、いいヒトが見つかるだろうし、落ちこむのはよそうとか、案外逞しいんです

いわば、そういう女のコの応援歌っていう意味合いもある

だいたい、失恋の歌だからって、苦しいとか悲しいとかを歌うことはないでしょ

そんな、悲しい歌ばっかりをステージに乗せたら、悲しくって、よけい落ち込んでしまうし、だいたい私の性分に合わない

それなら、私の性格に近いところで、失恋を見つめてやろう。悲しくもないのに悲しいフリをしても仕方がないじゃない。私にいちばん合う感じで歌ったほうが、ファンの人たちも入りやすいのではないかと考えたわけ

実際、ファンからも、森高らしくていいって意見が多いの。しかも、私は嘘がつけない性分だから、たとえ、自分が書いた詞ではあっても、自分に合っていない詞とか、嘘を歌った詞とかは、ヒトから借りてきたっていう感じで、ノリがイマイチ悪い。悪いだけじゃなくて、顔にも態度にもそれが出てしまう

それじゃ、せっかく私の歌を聞きにきてくれたファンに申しわけないでしょ。

だから、やっぱり自分にいちばん近い立場で、自分の詞を、[illegible]歌おうと決めたわけ

ただ、書くってことは、口でいうのは簡単だけど、いざ書いてみると、自分のいいたいことの半分もいえないものなんです

そこで、どうしたらいいかってことをいろいろ考えたの。その結果、『やっぱりミーハーでなくちゃいい詞は書けない』っていうことに思い当たったわけです

『ミーハー』っていうと、普通は、なんでも人のやることとかを真似したり、ファッションにノリやすいヒトとか、軽く見られがちでしょ。でも、私は、ミーハーは、あれもやりたい、これもいい、また、こっちもいいじゃない、とかね、なんにでも興味を持っている人とか、感性豊かな人というふうに解釈しています

私自身、かなりのミーハー。あ、これもカッコいい、こっちはもっとカッコいいって欲張りだし、絶対、ミーハー精神がないといい詞は書けないと思ってる

これからも、自分自身を主人公にしてこのミーハー精神で書いていくつもりだけど、ただ、背伸びしたような詞だけは、絶対書かないって心に決めてる

だいたい、私は、文学少女っていうタイプじゃなかったから、これまで書きためた詞とかもなかったし、言葉選びとかも上手じゃない。そんな私が書けることといったら、自分がこれまでに経験したか、それに近いことしか書けないわけ

そこで綴ってみたら、失恋の歌には違いないけど、やたら元気っぽい歌だったということだったの たぶん、これからもこの傾向が続くと思うけど、ヨロシクね

Talk ESSAY



「好きなヒトの前では、いつも輝いた自分でいたいな……」

たとえば女のコで、好きなヒトがいないっていうコいるけど、その女のコはおかしいなって思う。お互いに好きなとこまでいかなくても、いいなって思う人が、絶対いるはずなんです。

自分自身がそうだったから、好きなヒトがいないっていうのは、おかしいなあって思う。

好きなヒトがいると、もう毎日が楽しいし、生きてるなっていう実感がある。たとえば、イヤなことがあったり、なにか心に引っ掛かるようなことがあっても、そのヒトのことを想うと、そのヒトのためにガンバローとか、グーンと気分が盛り上がってくる

それは、やっぱり好きなヒトがいたり、そこまで行かなくても、いいなって想うヒトがいると、そのヒトがいつもどこかで私のことを見ていてくれるんだ。そのヒトに泣き顔なんか見せられないし、落ちこんだところを知られたくないっていう意識が働くからなのだって、そんな落ちこんだ私を彼が見たら心配するだろうし、だいいち、自分の好きな女のコの泣きベソみたら、せっかくの楽しい気分が台なしになっちゃうでしょ

私は、好きなヒトの前では、いつも輝いた自分でありたいなって思うから、イヤなこととか、心に引っ掛かるものがあっても、それを跳ね返そうとかガンバリ・エネルギーみたいなものがわいてくるの

だから私は、いまは好きなヒトがいないけどっていうときも、側に男のヒトがいたら、そのヒトを私の好きなヒトに置き換えて、自分の中に恋の気分の炎をかきたてるわけ

女の友達と映画を観に行っても、いま私の隣にいるのは好きなヒトなんだ。この映画を見終わったらどうしよう。とか、いろいろ夢想したりしている

私は、好きなヒトがいると、すごく自分に正直な素直な女のコになれる。そして、自分でいうのもおかしいけど、恋をしている女のコってすごくキレイだし、そういう自分を見るのがたまらなく好き

いいぞ森高ーとか応援を送ってしまう

これは、私だけじゃなく、女のコなら誰でも思っていることじゃないかな


忘れない・・・



よく、女のコは、夢を夢見るとかいうけれど、私は、昔から現実にはありえない夢とかは追いかけないタイプなの。

わずかに夢らしいものを追ったのは、幼稚園のころ、大きくなったら歌手になりたいとかいったことがあるけど、それは小さい子どもがテレビを見て、アイドルが華やかに歌っている姿なんかに憧れて、わけもわからずいったことで、本気で歌手になろうとかいうんじゃなかった。

歌とか、音楽とかはもちろん好きで、小さいころからやっていたけど、歌もずっと下手だ下手だといわれ続けてきたたし、女優も別に勉強したわけじゃないし、この世界に入るなんて夢にも思っていなかった。

もしも、私が東京生まれの東京育ちだったら、オーディションとかも受けて芸能界入りを夢見たかも知れないけど、熊本生まれの熊本育ちの私には、歌の世界とか芸能界は、はるか遠く離れた存在だったし、私がその世界で生きるなんて、まったくあり得ないことだと思ってましたからね。

こういうと可愛げがないけど、たまたま好きな音楽を続けてきたことが、この世界に入るきっかけになっただけ。

でも、ここまできたからにはもう、音楽とは離れられないし、私の音楽をもっといろんな人に聞いてもらいたいっていう希望があるし、わかってもらいたいという願いを夢にして、精一杯やって行きたいと思います。





これは私だけじゃなく、大部分の女のコにいえることだと思うけど、その恋が実るか実らないかは、1回目のデートでだいたいわかってしまうみたい

一目惚れとかは別にして、ある程度好感を持っている同士がデートする場合は、この1回目のデートがすごく大事ですね。

女のコは、それこそ、全身をアンテナにして、その人がどんな性格をしているのか、どんな趣味とかを持っているのか、私に合った人なんだろうかっていうことをキャッチするもの。

なにもビシッとキメる必要はないし、デートコースに凝ったり、食事を豪華にしたりすることも必要ないですね。女のコは、あくまでも、その人が自分に合う人かどうかということを見極めるのが目的だから、不潔でなければ普段着のままでいい。むしろ、そのほうがその人の生地が見えていいくらい。

問題は、フィーリングっていうのはおたがいが生まれ持ったもので、合うか合わないか、プラスかマイナスしかないし、これはっかりは理屈じゃなくて、合わなかったらゴメンナサイするしかないってこと。

たとえば、次のデートに誘ったとき、「今度ね」「約束があるの」とかいったり、黙って笑ったときは、「お友達のままでいましょう」というサイン。つまり、恋までには発展しないと思ってね。







私は、好きで好きでたまらない人が現れたとしても、過去のことはいわないと思う。過去だけでなく、女のコとして、やっぱりいえない部分とかあると思うの。それは、隠しているということではなくて、隠しておかなきゃいけない部分があると思うから

たとえば、ユーミンさんとかは、自分は天才であるとはっきり断って、過去とかもズバズバ本に書いたりしているので、すごい人だなとか感心しちゃってるけど、それは、あの人のキャラクターであって、必ずしも、誰もが告白する必要はないと思ってる

やっぱり、いっていいことと悪いことっていうか、ここまではいってもいいけど、その先は、黙っていたほうが、お互い救われるっていうことがあると思う

人って、それぞれ考えが違うし、一人一人の生きてきた道とかも違うから、なにもかもさらけ出すっていうのは、疑問だな

それに私は、嘘をつくのが嫌いだから、隠したい部分を脚色したりして告白するくらいなら、そっと自分の胸にしまって黙っていたほうがいいと思う



なんて不意なサヨナラ

これまで、いろいろプレゼントもらったけど、いちばん嬉しかったのは、中学3年のときに父から贈られたプードル。

犬は、昔から大好き。それは、たぶん子どものときから家にはいつも犬がいたからだと思う。

それが、ある時期だけ犬がいなかったことがあって、前から欲しい欲しいってネダッていたんだけど、なかなか買ってくれなかったの。それは、私が中学3年のときで、高校の受験勉強の真っ最中だったから。それで、高校へ入るまではムリだろうなとか、諦めかけていたころ、父が買ってきてくれたものだから、もう飛び上がって喜びましたね。

もっとも母は、受験の前だったから「この大切な時期に犬なんて」とか、怒っていたけど、家の中を生後2か月の子犬がチョコチョコ歩いている姿を見ているうちに、すっかり好きになって、いまでは、母がいちばん可愛がっています。みんなも好きだったから、我が家は、すぐに犬中心になってしまいました。

ジュリアっていう名前でね。いまでも私が家に帰ると、ものすごい勢いで走ってきてまとわりつく。きっと、子犬のころミルク飲ませたり、散歩とかに連れて行ったりしたことを覚えているからでしょうね。とにかく可愛い。ああ、ジュリアに会いに熊本に帰りたくなっちゃった。







優柔不断な男の人って、キライ

たとえば、デートして2人で歩いていても、その先、私をどこへ連れていってくれるのか、全然決めてない人とかイヤね。私が「どこへ行く?」って聞いても、「う〜ん、どこでもいい」っていわれたりすると、カーッとしちゃう。また、そういうことが一つあると、その人のイヤな面がますます見えてきて、そのうちなにもかもがイヤっていう感じになっちゃう。やっぱりデートとかしたときは、はじめに、どこどこへ行こう！とかいってほしい。そんなふうにはっきり告げられれば、平凡なところでも、女のコはイヤとかいわないものよ。だって、2人でいることが楽しいんだから





[illegible]にえてパッと終わってしまうことが[illegible]3日で別れたとか、1週間で別の男[illegible]カみたいな恋をしてました。[illegible]ときは落ちこんじゃって、ハタ目にも可哀想とか見えても、立ち直りが早いの。昨日まで、食事が喉を通らないなんていってたコが、今日は、お弁当パクつきながら"イイヒト見つ[illegible]いみたいですね。むしろ、失恋を何回か重ねてゆくうちに、本当に好きな人のタイプを探し当てる[illegible]だと思う。

夢の終わり





男で、うるさい人って嫌い。
だから、デートに誘われるのも、グジュグジュいわれるより、「明日会おう」とか「これから会いたい」とか、単刀直入に誘われるほうがいい。
たぶん、ズバッといえる人というのは、自分に自信がある人だと思うの。きっと、これだけは人に負けないぞ、というものを持っているから、ズバッと誘うことができるんだし、もし断られたとしても「そうか、わかった、じゃまたな」とか、サッパリしているしまたチャレンジしてくると思う。そういうたくましい人って好き。
実際こんな人に誘われたら、素直について行くでしょうね。



ネコってあんまり好きじゃない。小っちゃいネコは平気だけれど、大きいネコは苦手。なんかすぐ怒るみたいで。





一緒にいても2人の考えが同じってことはない。やっぱり、人間って行動するときは、いつもひとりぼっちだと思う。

私の芸能界入りは、遊び半分に受けたオーディションからはじまった。というとキザに聞こえるけど、これは本当のこと

私、小さいときからピアノをやっていたので、音楽大学に進学して、いずれは、ピアノの先生をやろうと思っていましたね。子どもが好きだったし、女もなにか手に職を持ったほうがいいと考えていたからね。ところが、試しに受けたオーディションに優勝して、あれよあれよという間に、レコード・デビューしちゃったというのが、これまでのイキサツ。でも、いまは、遊び半分とかハンパな考えは持っていない。それどころか、私の歌を聞いてくれる人がいるかぎりは、ライブを続けるし、歌も作り続けたいと思っている




GEORGES
Live

やっぱり一人暮らしだと、母のことがふと頭に浮かぶ。風邪をひいたりしたときは、そばにいてくれるだけでも違う。

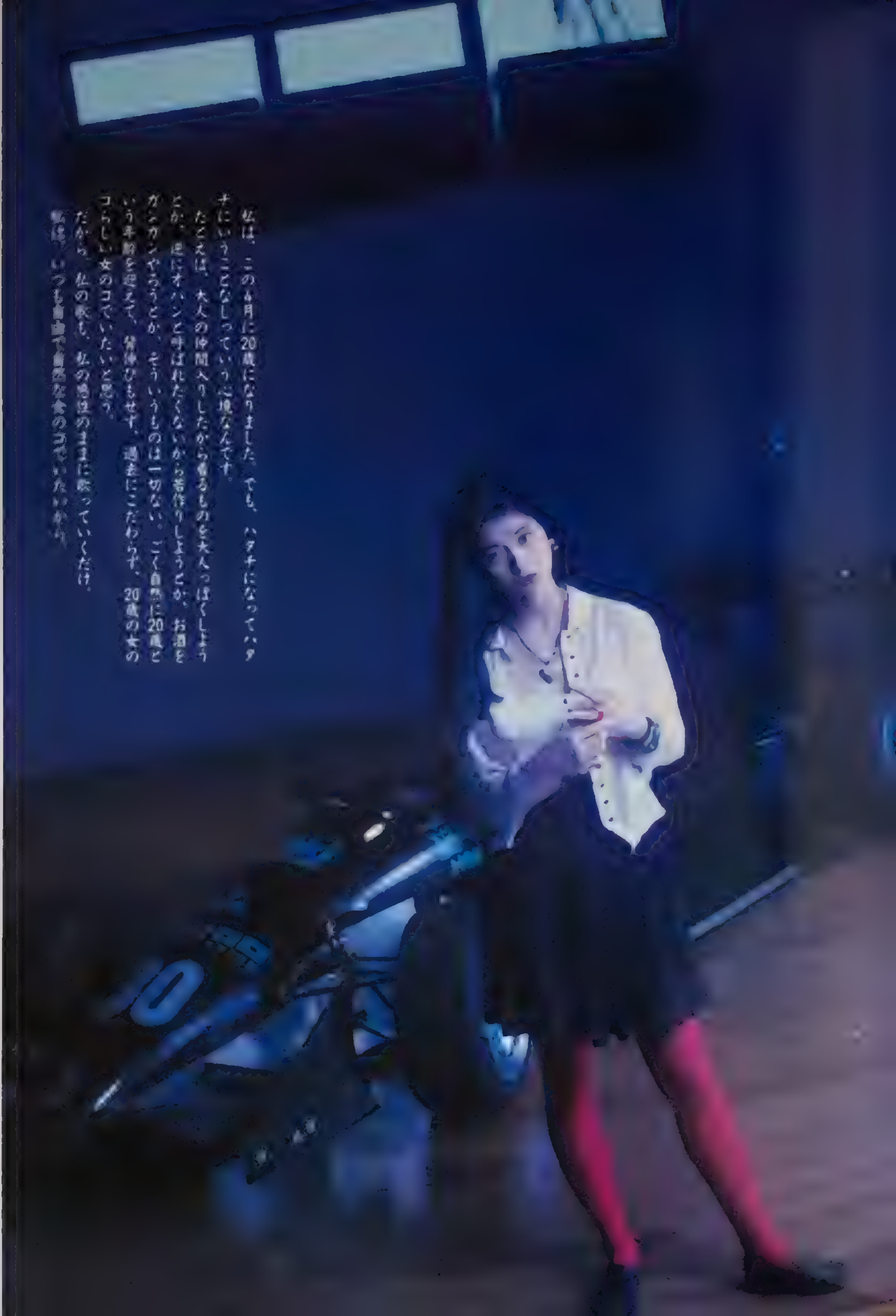








今年のコンサート・ツアーのスタートになった1月12日の渋谷公会堂でのコンサートで、私が涙を流したわけは、自分自身にプレッシャーがかかっていたから。結果がいいほうに出なければ、先は見えないなとか、自分の中で煮詰まっていた部分があったわけ。それが、あのステージで、これしかないって歌い方ができたことと、ファンの人たちが、そんな私の気持ちをわかってくれて、すごくノッてくれたでしょ。そのことに感激したっていうか、ホッとしたの。同時に安心感を覚えたの。そのとたん、自分でもわけがわからないうちに、涙が溢れて止まらなくなってしまった。



私は、この4月に20歳になりました。でも、ハタチになってハタチにいうことなしっていう心境なんです。
たとえば、大人の仲間入りしたから着るものを大人っぽくしようとか、逆にオバンと呼ばれたくないから若作りしようとか、お酒をガンガンやろうとか、そういうものは一切ない。ごく自然に20歳という年齢を迎えて、背伸びもせず、過去にこだわらず、20歳の女のコらしい女のコでいたいと思う。
だから、私の歌も、私の感性のままに歌っていくだけ。
私は、いつも自由で素直な女のコでいたいから。

けない嘘







あんまりうるさいのは嫌ですけど、男のコがついてきてくれて、あれこれいいながら、買い物するのに憧れちゃう。



買い物に行って気がついたことがある。たとえば洋服を選ぶとき、これまでの私のセンスからすれば、手を出さないだろうと思うような色とか、デザインとかも派手なものに手を出している。つまり、自分の中に「芸能界にいるのだから」という意識が働いているからかもしれない。でも、それは芸能人面をしたいからではないの

ステージに立つというのは、自分のためではあるけれど、同時にファンの人たちの代弁役でもあるわけで、その代弁役がプライベート・タイムだからといって、光を失った存在であってはならないと思う

クリスマスは外へ向かう楽しみ方なのに、お正月は家の中でのんびり過ごす楽しみ方だから、動と静でまるで違う。




戻れない夏





自分に正直でありたい、というのが、私の願いというか、信条なんですけど。実際には、難しいですね。

たとえば、好きな人が現れても、普通の女のコだったら、裸でその人の懐に飛び込めるけど、私のいま置かれている状況では、おおっぴらに、「あの人が好き」とかはいえないでしょう。

やっぱり、いまの私を支えてくれるファンの人たちとか、スタッフの人たちのことを考えると、自分の気持ちに正直になる前に、考えて行動する必要があるわけ。特にファンの人たちは、それぞれに、森高千里はこういう女のコだっていう憧れを抱いているわけでしょう。たとえそれが想像の所産であるにしても、こうあってほしい、これこれの女のコであってほしいという願いとかがあるわけです。それを無視することは、絶対できない

もちろん、森高だって生身の女のコだって開き直っちゃえば、それはそれで通用すると思うけど、そんなことは絶対したくない。





これは、ぜいたくなことなんだけど、仕事にノればノるほど悩みって増えるものなのね。

デビューしたては、とにかく、ステージとかに立っても、ファンの人たちの反応はどうだとか、ノリはいいかとか、それまで一つか二つだった悩みのタネが、どんどん多くなってくる。

それで思うことは、頂点に立っている人は、もっと大変なんだろうなということ。逃げるより、追いかけるほうが楽だっていわれているけど、追いかける私がこんなに悩みを抱え込んでいるんだから、1位の人の悩みは計り知れないな、とか思う。

とにかく、歌手なんて思ってもなかった立場におかれ、戸惑い、悩みながらも、精一杯いまを楽しんでいるのが、いまの私。でも、こうなったかぎりは、これが私の運命なのだから、与えられたチャンスを目いっぱい生かしていこうと、今はそう思ってる。





最近、やっと、歌手・森高千里と私・森高千里の使い分けができるようになった。これまでは歌手と私がゴチャゴチャになって、自分で自分がわからなくなってパニックになったりしてたけど、今は、私・森高はここまでやればいい、歌手・森高は、ここから先っていう線が引けるようになった。わかってみれば簡単なことで、おかげでとっても自分的にラクになったわね





りくつじゃない。

Chisato Moritaka

森高千里・写真集

撮影　木村　晴
1989年6月12日第1刷発行
1991年1月1日第6刷発行
発行者――野間佐和子
発行所――株式会社講談社
〒112 東京都文京区音羽2　12　21
電話　東京03―3945―1111（大代表）
デザイン――PENCIL STUDIO
印刷所――大日本印刷株式会社
製本所――国宝社







Chisato Moritaka

定価1550円（本体1505円）
講談社

雑誌 62201-07 ISBN4-06-103105-8 C0072 P1550E(0)